

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	5
➤ 第100号記念号特集	8
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ	18
➤ 会議・イベント案内 & 書籍等の紹介	19

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー 9/8 豊田市研修報告 & 11/2 滋賀県研修案内

2015年9月8日(火)、第1回「小さな自然再生」現地研修会を愛知県豊田市の矢作川研究所及び岩本川にて開催致しました。当日は雨天の開催となりましたが、一般参加者・豊田市関係者・事例集編集委員メンバーなど約40名が参加し、座学+現地研修+ワークショップで構成される充実した研修内容となりました。以下に開催概要を報告します。



(1) 事例集を教材とした座学研修

■ ふるさとの川づくり～岩本川～ 水辺の小さな自然再生をめざして (早川匡：矢作川研究所)

イントロダクションとして、岩本川の特徴・課題(地域の方々の川離れ、後継者不足、流下能力不足など)と取組み、めざす川の姿が紹介されました。岩本川の川づくりは、親～子～孫の3世代が参加し、川遊びが伝えられていくことをめざしています。

■ 小さな自然再生のすすめ

(三橋弘宗：兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)

小さな自然再生の基本的な考え方(定義、進め方、波及効果など)が、事例を踏まえ紹介されました。身近な川に触れること、川づくりに対する認識のハードルを下げることによって、“出来ることはたくさんある”ということが基本認識として共有されました。

第1回「小さな自然再生」現地研修会 愛知県豊田市・岩本川

■ 講師：矢作川研究所/事例集編集委員、 ■ 司会進行：(一社) ClearWaterProject、 ■ 記録等：JRRN 事務局

(午前) 会議室にて「水辺の小さな自然再生」事例集を教材とした座学研修

- ふるさとの川づくり～岩本川～ 水辺の小さな自然再生をめざして (早川匡：矢作川研究所)
- 小さな自然再生のすすめ (三橋弘宗：兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)
- 地質・地形特性から見た岩本川 (原田守啓：岐阜大学 流域圏科学研究センター)
- 岩本川の生物群、生息場 (山本大輔：矢作川研究所)

(昼休み) 各自昼食 (豊田市駅周辺店舗 or 弁当等)

(午後1) 岩本川にて現場研修

岩本川を歩きながら、川の様子、生き物、地質等を観察し、小さな自然再生に関わるアイデアを交換。

(午後2) 会議室にて岩本川の小さな自然再生に向けた議論 (ワークショップ)

- 上西郷川 市民主体の多自然川づくり (林博徳：九州大学大学院 工学研究院)
- 座学と現場研修を踏まえ、小さな自然再生の技術や協働の進め方について意見交換。



■ 地質・地形特性から見た岩本川

(原田守啓：岐阜大学 流域圏科学研究センター)

岩本川の地質・地形（花崗岩帯の砂河川、地形の起伏、流域面積など）から河道特性を読み解くポイントが紹介され、洪水に対する流下能力の確保と合わせて、普段の流量でも滞筋が保たれるような工夫が必要であることが川づくりの論点として示されました。

■ 岩本川の生物群、生息場

(山本大輔：矢作川研究所)

岩本川の生物群、生息場の特徴として、主に魚類から見た岩本川の環境が紹介されました。岩本川にかつてたくさん見られていたウナギやモクズガニ、そして“川ガキ”が戻ってくるような、ふるさとの川への思いが伝わりました。

■ 上西郷川 市民主体の多自然川づくり

(林博徳：九州大学大学院 工学研究院)

岩本川と同様の花崗岩地質特性を持つ福岡・上西郷川の取り組み事例が紹介され、川づくりを楽しい体験と結びつけて、イベント等と連携して地域で川を管理していくことが成功の秘訣であることが示されました。

(2) 岩本川の現場研修

岩本川現地を実際に歩きながら、川の様子、生き物、地形・地質、後背地とのつながり等を観察し、小さな自然再生に関わるアイデアを交換しました。



岩本川の現場研修の様子



岩本川の生き物見学

(3) 岩本川の小さな自然再生ワークショップ

座学と現場研修を踏まえ、岩本川の小さな自然再生の技術や協働の進め方について、ワークショップ形式で意見交換を行いました。6つの班に編成された参加者それぞれが、岩本川で実施できそうな小さな自然再生の具体的なアイデアを出し合い、各班で絞り込んだ最適案を発表し、実現性を含めて議論を行いました。

矢作川研究所（豊田市）では、今回の協議結果も踏まえて、懇談会にて計画づくりを進めていくこととなります。JRRN としても、事例集編集委員の指導のもと、フォローアップしていければと思います。



ワークショップの様子

なお、11月2日（月）には、第2回研修会を滋賀県の協力を得て、事例集でも紹介した滋賀県長浜市・高時川にて開催する予定です。詳細案内と参加申込は、10月上旬頃に JRRN 会員皆様にご案内致しますので、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

第2回「小さな自然再生」現地研修会 滋賀県長浜市・高時川



高時川現地(既往施工箇所)

- 日時：2015年11月2日（月）
- 主催：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- 共催：滋賀県長浜土木事務所、JRRN ※調整中
- 会場：滋賀県長浜土木事務所／高時川
- 参加費：無料（懇親会別）
- プログラム（案）：※調整中
午前：「小さな自然再生」事例集を用いた座学研修
午後：高時川にて現場研修

本活動は（公財）河川財団の河川整備基金の助成を受けて実施しています。

（JRRN 事務局・後藤勝洋）

小さな自然再生普及プロジェクト - 9/10「小さな自然再生が中小河川を救う IV」開催報告



開会挨拶： 林博徳（九州大） 伊豫岡宏樹（福岡大学） 山下慎吾（Sakanayama Lab.） 竹門康弘（京都大学）

2015年9月10日（木）、応用生態工学会郡山大会にて自由集会「小さな自然再生が中小河川を救う IV」が開催され、80名を超す参加者とともに素晴らしい先進事例を共有し、また小さな自然再生の今後の更なる展開について意見を交換しました。

- 【日時】 2015年9月10日(木) 16:00~18:00
- 【場所】 日本大学工学部キャンパス 70号館 7012教室（福島県郡山市）
- 【企画】 林博徳（九州大）、三橋弘宗（兵庫県立大）、原田守啓（岐阜大）
- 【プログラム】（司会進行：林博徳・原田守啓）

■ 話題提供：

- ①これまでの経緯と発行した事例集の紹介
和田彰（JRRN 事務局）
- ②各地の事例紹介
 - (1)福岡での取り組み（地域で守る室見川の「環境」と「文化」～シロウオ産卵床造成プロジェクト）
伊豫岡宏樹（福岡大学）
 - (2)高知での取り組み（三崎川における取り組み - 市民主導型の手づくり魚道）
山下慎吾（高知工科大学/Sakanayama Lab.）
 - (3)京都での取り組み～川の恵みを活かすための流域自治体・上下流漁協・市民の連携活動～
竹門康弘（京都大学/京の川の恵みを活かす会）

■ 質疑および総括（コメンテーターのコメントをもらいながら会場と討議）：

※コメンテーター：

玉井信行（東京大学名誉教授、JRRN 顧問）、
島谷幸宏（九州大学）

※コーディネーター：

三橋弘宗（兵庫県立大学）



質疑および総括： 三橋弘宗（兵庫県立大）



コメンテーター

本自由集会の講演内容や質疑及び総括については、JRRN 事務局が講演録としてとりまとめ、後日改めて皆様にご紹介させていただきますので、もうしばらくお待ちください。

事例紹介やコメンテーターとしてご協力頂いた皆様、また自由集会に参加頂きました方々、どうもありがとうございました。

（JRRN 事務局・和田彰）

「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウム 開催案内(11/28・京都)

1. 「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウムの開催目的

近年の世界経済における安定は、後発発展途上国の経済発展の基盤づくり、新興国の世界経済の牽引、さらに先進国の経済再生が必要であると言われております。それらを下支えするためにはインフラ整備・管理などが重要です。

特に我が国は、高度経済成長期以降の防災や環境を配慮するといった総合的なインフラ技術の発展に支えられて急激な経済成長を経て成熟社会に至りました。この日本のインフラ技術に支えられた歩みは、発展途上国の更なる発展、先進国の経済再生のための参考になると考えられます。

この日本のインフラ技術の中でも、河川インフラ技術は、高度な治水・環境保全・利水等に利用され、発展してきました。これらの実績や知見を世界に発信するために、世界各国のエンジニアが集まる世界工学会議の場で、日本を始めとする各国の防災・環境に配慮した河川技術の取り組みに関わる国際シンポジウムを開催し、各国の河川技術の専門家や関係者との意見交換の場を提供することを目的として開催するものです。

2. 開催諸元

本シンポジウムの開催諸元は以下の通りです。

主催：「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」実行委員会
 共同開催：世界工学会連盟 (WFEO)、日本工学会、日本河川・流域再生ネットワーク、日本建築学会、土木学会
 事務局：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
 後援：日本学術会議(予定)、国交省(予定)など
 日時：2015年11月28日(土) 9:00~18:00
 会場：国立京都国際会館、Room-H (右図参照)
 参加料：無料※
 定員：約120名(聴講者は、行政、実務者、学識経験者、学生など工学に関わる幅広い層を予定)
 申し込み：右記4.参照(シンポジウムのみ参加は無料)
 使用言語：日本語・英語(同時通訳予定)
 URL：<http://river-innovation.net/>

※ 本シンポジウムの参加の是非を問わず、11月29日以降の世界工学会議(WECC2015)に参加される場合には、別途世界工学会議への参加登録が必要となります。

3. プログラム

シンポジウムは以下の3つのセッションで開催される予定です。プログラムの詳細は、シンポジウムウェブサイトをご確認ください。

- セッション I : 河川・水域の防災・減災に関する基調と一般講演
- セッション II : 河川環境・水利用(利水/親水)に関する講演
- セッション III : 社会貢献の視点からの災害と環境に関する河川整備・管理についてのパネルディスカッション

※ウェブサイト：<http://river-innovation.net/>

4. 参加申し込み

シンポジウム参加申込を開始しました。本シンポジウムへの参加申込にあたっては、事務局宛のE-mail(secre@river-innovation.net)もしくはFAX(03-3253-0640)にて以下の情報を送付ください。

- ・氏名
- ・所属、役職
- ・E-mail アドレス、電話、FAX 等の連絡先

参加をご希望される方は、早めの申し込みをお願いします。なお、本シンポジウムは、(公財)河川財団の河川整備基金の助成を受けて実施致します。



会場(出典:公益財団法人国立京都国際会館ウェブサイト)

(JRRN 事務局・伊藤将文)

10 月



川沿いの道から見える小櫃川



小櫃堰公園

<http://1000enpark.com/park/chiba/kisarazu/obituzeki.html>


あの日のあの川 リレー日記 ～第9話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第9話主人公 森本 健太

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：千葉県小櫃川)

「川の魅力と伝承」

いつのこと？：小学生と今

どこの川？：小櫃川

「10年前にはあったはずの川への道が閉ざされている。」

私が小学生のころには、この砂利道から小櫃川に入れる小道があったはずなのに・・・。

私の故郷は千葉県木更津市。

実家は住宅地にあり、辺りは一面アパートが並んでいる。3,4階建の建物が多いため、見通しはあまりよくない。あるものといえば、アパート間のブランコだけの小さな公園くらいだった。そんな住宅地をしばし歩くと小さな橋が見えてくる。その橋は自然への入り口で、渡ると多くの田んぼや畑が一面に広がり、景色が突然と緑に変わる。車も停まっていない、自然豊かな開放的な空間である。

田んぼ沿いには自動車が1台やっと通れるくらいの、舗装もされていない狭い砂利道がある。この道と川は近くにあるのだが、川沿いはたくさんの大きな草が生えており、ここからは見るのがやっとという感じで、入ることはできない(写真左上)。この道を川沿いにしばらく歩くと、川へとつながる幅1mくらいの小さな道が現れる。この道は生い茂る草の一部が刈られただけで、この周辺ではここからでしか川に入ることはできない。この道を10mほど歩くと、ようやく小櫃川に出会えるのだ。

小学生のころは、夏になると理科の授業の一環で小櫃川に環境学習に行っていた。4~5人のグループに分かれて、川では何をどのように調べるかをあらかじめ考える。見てもよし、網を使って生物を捕まえるのもよし、方法は自由だった。小学校から小櫃川までは徒歩10分程度で、車通りも少なく行きやすかった。当日は、リュックをしょって運動靴を履いて、みんなで川に歩いて向かう。川に着くまでの時間もこれまた楽しい。暑い夏、冷たい川に入れることはとても嬉しいことだったからだ。そして川に到着！川に着いたらまず入

水！・・・とはいかずにしぶしぶ先生の注意事項を聞く（今思えば、この時の注意事項は命を守る大切なことだった）。こういう時の先生の話は今も昔も実際の時間よりもかなり長く感じる。終わると今度こそ待ちに待った入水！暑い夏に川の水は冷たく気持ちいい。手で冷たい水を友達とかけ合う。それはそれは真夏の海水浴場の光景のように。冷たい水を満喫した後は、親に買ってもらった新しい図鑑を見ながら、生き物や植物を調べた。ただ、個人的に昆虫は苦手だったので、調査したのはアメンボや魚がほとんどであった。ちなみに今でもあまり虫は得意にはなれていない。苦手なものは苦手である。そういえば、「川は突然深くなるから、地面が見えないところは行っちゃいけませんよ！」って先生が注意してくれたこともあった。無視して深いところまで行ってしまって、おぼれそうになり怒られた記憶がある。昔も今もやんちゃなところは変わっていない。

時にはうねうねと動く不思議な生物がいて、触るのをためらうときもあったり、はしゃぎすぎて怪我をしたりしたこともあったけれど、今となっては全てが思い出だ。

そんなことを思い出しながら、数年ぶりに懐かしい道を歩きながら小櫃川に向かった。懐かしい風景だ。広がる田んぼ。そしてこの、舗装されておらず、いかにも歩きにくい砂利道。変わっていない！

幼い時の記憶が一気に頭を駆けめぐる。懐かしさに浸りながら小走りで川に向かった。

「あれ・・・？」思わず足が止まる。「道がない・・・」そう、10年前にはあったはずの小櫃川への入口がなくなっていたのだ。正確に言えば、たくさんの大きな草が道を覆っている。かなり長い間、草を刈られた形跡はなかった。「もしかして、今は川での環境学習はないのか？」そう思った。

以前、地元の塾で講師をしていた経験があり、そこで現在の小学生に話を聞いてみた。すると予想通り、川での環境学習は、今は行っていないという。

近年、環境問題が多く取り上げられている中で、このような環境学習実習がなくなっていることは非常に残念だと考える。先日大雨による洪水の大規模な被害や川での死亡事故が発生していることから、川は危険な場所という認識が強くなっているということだろうか。

確かに川は危険な一面を持っているかもしれないが、私たちが生活するうえで大切に魅力ある存在でもある。その川の魅力を子供たちには是非、直接見て感じてほしい。私自身、白川研究室に来てから多くの川を見て触れて、川には今まで知らなかった多くの魅力があることを知ったからだ。

今の子供たちが年を重ね、さらに自分の子供に川の素晴らしさや魅力を伝えてもらえれば嬉しい。そのためにも、今の子供たちにもっと安全に自然を見て、楽しんでもらえるように、私自身も地域貢献活動やボランティア活動に取り組んでいきたい。

（次は佐々木 洸さんにバトンを託します）



小櫃川にかかる橋



小櫃川の釣りスポット

水辺からのメッセージ No.77

岡村幸二 (JRRN 会員)

心地よい水音の風景：

閑静な市街地の中を勢いよく流れ落ちる“どんどこ”落差工



撮影：2014年9月（富山県富山市・いたち川）

◆地域と深く結びついた川の姿

いたち川は常願寺川中流部から取水され、富山市の東を流下しながら富山駅北地区で神通川にそそぎます。かつては“富山の葉”を粉状に引く水車が数多く見られたといえます。“どんどこ”の上流区間は近年、地域の要望を聞きながら風合いのある自然石玉石護岸の整備がされました。

◆“どんどこ”の愛称で親しまれ

富山の方言で取水堰や落差工のことを通称“どんどこ”と呼ぶそうです。落差工の下流は浅瀬となっていて、子供たちが大勢で川を渡るイベントやサギやカモが餌を求める多自然河川空間です。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

特集：東日本豪雨から考える～これからの川づくり、川とのつき合い方

写真出典：<http://www.sankei.com/photo/story/expand/150910/sty1509100015-p1.html>

東日本豪雨からまもなく 1 か月を迎えますが、被災地では今なお、懸命な復旧・支援活動が続けられています。

この度の甚大な災害を経験する中で、被害の軽減に向け今後私たちに何ができるのか、これからの川づくりや人と川の付き合い方などについて色々思いを巡らせた方も多いのではないのでしょうか？

2006 年 12 月に発行を開始しました JRRN ニュースレター(月刊)が今月号で第 100 号を迎えたのを機に、**特集「東日本豪雨から考える～今後の川づくりや川とのつき合い方」**を企画し、皆様より本テーマに関わるメッセージを募集致しました。

本特集の前半では、2015 年 9 月 18 日(金)～30 日(水)に皆様よりお寄せ頂いたメッセージをご紹介します。

また本特集の後半では、JRRN 活動で様々な協力を頂いている「筑波大学白川(直)研究室」(JRRN 団体会員)の常総水害対策チームによる**寄稿記事『2015 年鬼怒川氾濫に伴う常総水害対策チームの設置とその活動について』**をご紹介します。本寄稿では、現地調査の概要とともに、調査に参加された 19 名もの学生達の心に響くメッセージも頂いております。

本特集が、これからの川づくり、川とのつき合い方について改めて考え直すきっかけになることを願うとともに、皆様よりお寄せいただいたメッセージを踏まえ、JRRN が果たすべき役割についても真摯に考え、これからの JRRN 活動に反映させてまいります。

短期間でのお願いにも関わらず、本企画に賛同しメッセージをお寄せ頂きました皆様、どうもありがとうございました。

「東日本豪雨から考える～今後の川づくりや川とのつき合い方」

にお寄せ頂いたメッセージ

私の住居は大阪府熊取町です。幸い3つの川は2級河川、堀割で天井川ではありません。

しかし、今回の越流や堤防の決壊の様子を報道で知り、地元熊取の川に置き換えて考えています。

雨量年間1300mm程度ですが、最近のいつどこで起こるかかわからないゲリラ豪雨や線状降雨帯など発生を想定して、リスクコミュニケーションに着目した洪水危機管理を考えなければならないと思います。

防災マップ（熊取町）には浸水危険箇所がある。しかし、記載されていない。前回のマップにあった土砂災害の恐れのある危険区域が削除されたなど、住民には何故なのかわかりません。

大事ことは、現場を詳しく住民と共に検証して、マップにはないが危険箇所や避難場所の再点検を行うことが一番大事で重要な作業であると思います。

数が多くてできないのではなく、コツコツとそれをやり抜く姿勢こそ行政に求められているのだと、また職員が自覚することだと思います。（公益法人・70代以上）

堤防崩壊と越流防止について。

堤防崩壊防止は堤防に土に雨水が浸透しないためブルーシートしきます。堤防に対して水圧が強い場合減圧壁を設置します。越流に対しては工業製品の止水板を設置します。（瀧本柔幸）

上流域のダム建設に巨万の税金を使っているが、その分を、下流域の堤防や治水施設に投入するようにこれまでのゼネコンとの癒着を断ち切る仕組みを求めます。

- ① ハザードマップの危険地帯の人家などは高台への移転などその費用を補助するようにして、氾濫しても被害が最小限にとどまるような対策をおこなうこと。
- ② 行政における、河川氾濫の防災避難マニュアルなどを整備する。（市民団体・60代）

これからの川づくりには、古来からの知恵と、現在の予測、解析技術を合わせた学問のあり方が求められます。環境、防災、利用の各分野の単目的ではなく、総合的なあり方を本格的に検討すべきではないでしょうか。

（例えば、自然堤防の保全）

学校教育や生涯学習でも、川、そして森と海との関係が理解できる内容を推進が重要です。

（清野聡子・九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学研究室）

日頃から、「川の水は溢れることがある」の認識がなければいけない所。

しかし、住民にはその認識が少ない。

万一のことを考え、逃げることを考えていないのではないかな？

行政も逃げる方向さえ間違えても平気で知らんぷりには呆れる。

いつどこで起こっても不思議でない「ゲリラ豪雨」、川や水路そして自宅前の排水路への関心が、水への用心である。（公益法人・70代以上）

川に関わる仕事に長年携わってきた者として、「果たして今まで自分は何をやってきたんだろう？」とがっかりさせられたのが今回の鬼怒川の破堤でした。それと同時に、東日本大震災を経験してもなお、「人の力で、技術の力で自然災害は克服できるはず。」という過信が自分のどこかに残っていたことに気付かされました。

明治以降、近代技術と強力な中央集権体制により、日本全国の治水安全度は格段に高まりました。もし今回と同じような雨が数十年前の鬼怒川に降ったならば、きっと今回とは比較にならない大きな被害が生じていたことでしょう。これからの川づくりを考えると、まずは素直に、堤防、ダム、遊水地などの治水施設を先人が地道に整備してきたことを誇り、また奮闘してきた方々をきちんと讃えることを忘れてはならないと思います。そして同時に、こうした技術は決して万能ではないということを肝に銘じなければなりません。

気候変動への適応策・緩和策がここ数年議論されてきましたが、正直、まだしばらく先の話題であり、自分にとっては他人事だったように思います。しかし今回の災害を経験し、水災害は克服するものではなく上手にかかわす、いなすもの、そのために様々な人達で知恵を絞り、特にソフト面の最適な組み合わせを生み出していくことの必要性を痛感しました。

破堤リスクは事前に把握できていたが対処できなかった、ハザードマップを精度よく作っても役所にも市民にも上手く活用されていなかった、折角整備した防災無線のアナウンスが住民には届かなかった等々、「あと一歩の詰め」が甘かったことが今回の教訓として得られています。

最新の河川技術を駆使してツールやシステムを整備することで満足し、命を守るために市民一人一人に丁寧にその成果を届けるあと一歩の努力が足りなかったことが悔やまれます。しかし、その詰めの部分にこれからは注力し、効果を高めるためのきめ細かい取組みができれば、これまで先人が積み上げてきたハード・ソフトの様々な資産をフルに活用した新たなステージに到達できる可能性も感じます。

日本には、川と密接に関わりながら生活を営んできた長い歴史があります。啓発、環境教育、市民活動など、手段は色々あると思いますが、人と川の関わりを再考する、日頃の暮らしに「川」の存在を意識できる社会を目指した取組みに積極的にお金を投資することが、時間は要しますが、水災害と共存するしなやかな社会づくりにも繋がると信じます。 （民間企業・40代）

川で起こる事故を少なくしたい。 （行政機関・40代）

治水対策一辺倒にならずこれからも環境とのバランスの考えた整備が大切だと思います。 （民間企業・60代）

メッセージをお寄せ頂きました皆様、どうもありがとうございました。

寄稿：2015 年鬼怒川氾濫に伴う常総水害対策チームの設置とその活動について

筑波大学白川（直）研究室（JRRN 団体会員） 常総水害対策チーム

1. 常総水害対策チーム設置の経緯

台風第 18 号が 9 月 9 日 10 時過ぎに愛知県知多半島に上陸した後、日本海に進み、同日 21 時に温帯低気圧に変わった。台風第 18 号や台風から変わった低気圧に向かって南から湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本から北日本にかけての広い範囲で大雨となり、特に関東地方と東北地方では記録的な大雨となった。

これにより、各地で水害や土砂災害が発生し、広範囲に渡り被害をもたらした。その中でも鬼怒川の若宮戸地先（25.25km）で越流と三坂町地先（21km 地点）で破堤が発生し、鬼怒川左岸側から小貝川右岸側にかけての茨城県常総市一帯が水没し、大規模な被害をもたらした。

これを受け、本研究室では災害発生翌日の 9 月 11 日午前「常総水害対策チーム」が設置された（図-1）。行う内容としては

- ・メディア情報の整理
- ・復旧ボランティアへの参加
- ・浸水状況調査
- ・その他調査／分析

を主とした。

短期的な目標としては 9 月中、毎日現地調査を行い、災害情報の収集を行うこと、中期的な目標としては長く現地へ赴き、復旧支援や調査を継続的に続け、今後の防災計画に役立てていくためのものである。

2. 活動内容

活動は 9 月 10 日～27 日の 18 日間連日行った。調査を主としつつも、人数が確保できる日などは優先的にボランティア日とした。日付ごとの主な活動内容を表-1 に示した。毎日行き先を変え、被害状況の調査、痕跡浸水深の計測、標高測量、聞き取り調査などを行った。18 日間、従事した延べ人数は 85 名である。

表-1 9 月 10 日～27 日の主な活動内容

日付	行き先	内容	活動人数
9月10日	小貝川右岸	災害当日	5名
9月11日	若宮戸(越流点) 八間堀川	被害状況把握調査	7名
9月12日	本豊田, 新石下 大房, 山口	被害状況把握調査	3名
9月13日	越流点, 破堤点 市役所, 釜屋堀川	被害状況把握調査	4名
9月14日	破堤点, 豊田城	被害状況把握調査	4名
9月15日	破堤点, 水海道 新井木	被害状況把握調査 ボランティア	4名
9月16日	破堤点, 若宮戸 越流点, 石下駅周辺,	測量調査 被害状況把握調査	7名
9月17日	八間堀全両岸 水海道, 釜屋堀川	測量調査 流れの向き調査	7名
9月18日	左岸幹線用水路	流れの向き調査	5名
9月19日	石下駅周辺 下妻市原, 羽子	氾濫域の境界調査 ボランティア	3名
9月20日	石下駅, 若宮戸 鬼怒旧河道	氾濫域の境界調査	3名
9月21日	若宮戸(江連用水路)	氾濫域の境界調査	3名
9月22日	若宮戸	ボランティア	7名
9月23日	破堤点, 中妻 千代田堀川, 八間水門	氾濫域の境界調査	3名
9月24日	新八間分派 病院, 排水場	聞き取り調査	5名
9月25日	新八間堀川	ボランティア 氾濫域境界調査	11名
9月26日	大崎町, 東町 十華町, 沖新田町	聞き取り調査	2名
9月27日	吉野, 三妻	聞き取り調査	2名



図-1 常総水害対策チームの設立



図-2 浸水深調査

3. 被害の状況

被害状況の写真を図-3～図-5 に示した。家屋の浸水や道路の冠水、車の流出、農地へのがれきの流入などが目立った。翌日に水が引いたところもあれば、3日間程度水が引かない場所もあった。特に破堤点、越流点付近は水の勢いが強かったことを物語っていた。



図-3 破堤点付近の道路の様子（9月16日撮影）



図-4 越流点付近の写真（9月12日撮影）



図-5 洗掘された民家の庭（若宮戸，9月17日）

4. 常総水害対策チームの各個人のコメント

チームのメンバーのコメントを下記に示した。

最後に今回、水害直後の混乱の最中で、大変お忙しい時期にも関わらず、多くの住民の方、行政の方に調査にご協力をいただいた。この場を借りて深く感謝を申し上げますと同時に、一日も早い復興を心より祈念致します。

【常総水害対策チームメンバーのコメント】

「現実離れた現実」

私はなかなか活動に参加する時間が確保できなかったが、一度だけ現地に赴いてボランティア活動に参加出来る時間を取ることができた。ボランティア内容は大きな被害を被った個人宅の清掃であったが、私が伺った頃には物が散乱している様子もなく、後は部屋の隅の泥などを取り除くこまかな作業が残るのみであった。しかし一見綺麗になっている部屋からも、ところどころに散見される水のしみから、いかに洪水の規模が大きかったかが伝わってくる。ニュースなど、画面を通じてその凄まじさを理解したつもりではあったが、実際にその地で、このくらいまで水が来て、というのを目の当たりにすると、それがいかに「現実離れた」災害であったかが感じられた。まちを移動するときこの辺一帯はすっかり水に浸かっていたという話を聞いても、そんなことが現実起こっていたなんてにわかに信じがたい話で、少なくとも自分の経験からその光景を想像することは出来なかった。実際に被災地を訪れ、そこに住む人と話すことは、自分の経験していないことをも生々しく感じさせた。こういった感覚を共有していくことが、生きている本当の、防災意識の形成に繋がってくるのだろう。

国際総合学類 3年

佐藤 達裕

「水害調査を終えて」

9月10日の豪雨による主に鬼怒川の水害は、身近に自然の怖さを思い知らせるものでした。特に破堤点付近の様子を確認しに向かった時、その悲惨さに息をのみました。人間は自然の猛威の前にはどうすることもできないと、これまでテレビ越しで薄い認識だったものが強く植えつけられました。被災された方々の心情を思うと、心が痛みます。

今回の水害を通して強く感じたのは、前または事後の行政の対応が被害の大きさ、人命確保に大きく左右するということでした。河川の決壊という数多くの死者を出してしまってもおかしくない災害において、不

謹慎ではありますが行政の呼びかけ（または住民自身の判断）により死者を数名に食い止めたことは、他国または他地域で起こった災害被害に比べると意味のあるものではないかと思えます。もちろんゼロを目指すべきで、改善点も厳しい意見もありますが、私は今回の行政の対応は評価できると思えます。

最後に、私自身、私用のために白川研究室・水害対策チームの活動にあまり参加できず、毎日報告書に目を通して活動を見守る日々だったのですが、先輩方の地道な調査活動に敬意を表したいと思えます。

国際総合学類 3年
藤原 誠士

「現場を訪れて」

関東・東北豪雨災害を受けて、災害に対する意識が大きく変わりました。

鬼怒川の堤防が決壊することとなった前日、私の住むつくば市も豪雨に見舞われていました。まさか隣接する常総市が悲惨な状況になってしまうなどは想像もせず、今までに経験したことのない雨量に驚きつつも、楽しんでいる自分がいました。

堤防決壊から3日後、被災した現場へ赴き、浸水した家から黙々と家具や畳を運び出す住民を目にして、豪雨を楽しみ、自然の脅威への意識が低かった数日前の自分を強く恥じました。

建物の壁についた水の跡は、自分の背丈以上にまで及んでおり、今回の災害の威力を目の当たりにして初めて、自然災害は他人事ではないのだと、地震や台風、火山噴火等、多くの自然災害が起こる日本に住む皆が、災害に対する意識を高めるべきなのだ、実感しました。

これまで、日本各地で起こる災害被害のニュースを見聞きしても、どこか他人事な自分がいましたが、今回、被災地が近かったこと、そして現場を見たことで、災害に対する危険意識が生まれることとなりました。

国際総合学類 3年
平尾 真菜

「現地調査を通じて」

水害が起こった翌日に災害現場に調査する機会がありました。私にとって被災地に行くことは初めてのことでありましたが、そこでは私の想像をはるかに超えた光景が目に入り、衝撃的であったことを覚えています。多くの道路が冠水しており、まともに通ることができませんでした。道端の排水路が流されており、田んぼの真ん中で倒れていました。水が引いた場所でも泥が残っており、水害の根強く残っていることを実感しました。数日後に破堤点付近の視察や民家での聞き

取り調査をしました。破堤点ではいまだに水害当時の影響が残っており、多くの瓦礫が残っていました。民家を訪れた時には、まだまだ復興作業が終わることがなく、それが何時終わるのかすらわからない状況でした。水害後、ボランティアがきてくれたそうですが、それでも足りずに今尚毎日復興作業をしていることを聞き、災害の恐ろしさを認識しました。

国際総合学類 3年
守谷 賢人

「実際に自分の目でみるということ」

水害は毎年日本各地で起きていますが、今まではこれについて報道するニュースをテレビや新聞で見かけるたび、どこか自分とは距離を感じ、具体的に何か行動するということはありませんでした。しかし今回の水害では、被害にあった地域が個人的なつながりのある地域であることや、周りに河川の研究をしている人が多くいたおかげで、現地での調査やボランティアに参加することができました。現地にいた時間の長さに比して、実際に訪問して目にしたもの、耳にしたもの、触れたものすべてが圧倒的な密度で私の中に残っています。現地を移動している際、非日常の様を呈する景色の中に垣間見える日常的な風景に衝撃を受けました。実際の被害は離れた場所から知るよりずっと悲惨で、そこからの復興はずっと地道で時間の必要なものだと認識しました。時間が経過するにつれ、失われる情報もありますが、新しく得られてくる情報もあります。今回の災害を活かし、次につなげていく必要があると思いました。

国際総合学類 3年
山田 怜奈

「自然災害は突然に」

災害は他人事ではないということを感じました。これまで災害とは無縁の人生を送って来た私にとって、常総の水害は初めて身近に起きた大規模災害でした(私は茨城生まれの関西育ちですが、阪神大震災発生時は茨城に、3.11の折は関西で生活しており、どちらも運良く被害に遭わずに済みました)。普段通り生活できる幸せと、その日常が突然奪われる自然災害の恐ろしさを感じさせられました。そして、「災害は忘れた頃にやってくる」とよく言うので、災害を他人事と思わず、日常を守るために備えておくことの重要性を改めて認識しました。

国際総合学類 4年
佐々木 洸

「調査を通じて」

私はこの活動に決して大きな貢献をできた訳ではありませんが、自転車で行けるような近い場所での大災害から学ぶことは十分にありました。

この活動で被災地を訪れ現地を見たり話を伺い、また災害に関するメディアや行政の情報を集めたことで見えてきたのは「混乱」でした。突然の災害のため行政やメディアの情報が一致せず避難の呼びかけなど対応に混乱が生じ、住民側も「まさか大事には…」と避難が遅れてしまう状況がみられました。実際に石下の破堤箇所付近でも被害の様子は一様ではなく、様々な要因が予測と呼びかけを困難にさせていたことがうかがえました。これらは人間が対応している以上ある程度仕方のないことなのでしょうが、災害の規模がさらに大きければ混乱が多大な犠牲を生じさせてしまうことは頭に入れておかなければならないでしょう。

国際総合学類 4 年

高鳥 圭亮

「常総市の水害について」

今回の常総市水害調査で、被害にあった病院の看護師さんに話を聞く機会がありました。当時、病院内の水かさが増す中で、医師や看護師達は、入院患者の安全を第一に考えながら、医療器機の水没を最小限に食い止めるべく懸命に行動していたそうです。

また、住宅の一階部分が浸水してしまっている地域では、昨日まで普通に家族で使っていたであろう机や棚、本などが泥だらけになって家の外に積まれています。

テレビの映像ではなく実際に自分の目で被災地の状況を見たのは初めてであり、被害にあった方々の声を直接聞くことも今までにない経験でした。被災地の一日でも早い復興を願っています。

工学システム学類 4 年

中原 結衣

「ボランティアを通じて」

私が高校生の時、東日本大震災がありその時もボランティアに行ったことがありました。しかしその時は、茨城県の避難所となっていた体育館でのボランティア活動だったので、東日本大震災の被災状況を実際に目の当たりにすることはありませんでした。しかし、今回ボランティアとして被災したお宅に伺った際、水害の爪痕がはっきりと残った状態を目にしてショックを受けました。今までテレビの画面越しで被災状況を見て、大変だな、自然災害は恐ろしいな、早く復旧するといいな、などとどこか他人事のように感じていましたが、実際に自分の目でみると水害の恐ろしさを改め

て痛感しました。そして被災地の復興のために自分が何を出来るのか、ということを考えさせられました。東日本大震災から 4 年半たった今、多くの人は日常の中で震災について思い出すことはほとんどないのではないかと思います。しかし、まだ被災地では仮設住宅で暮らしている方も大勢いらっしゃいます。今回の水害においても、月日を重ねるとともに世の中の人々の記憶から薄れていってしまうかもしれません。そうならないように水害の恐ろしさを伝えていく活動というものも大切なのではないかと思います。

工学システム学類 4 年

渡邊 麻里乃

「慣れ親しんだ筈の街が一夜にしてその面影を失った」

この度の豪雨で思いがけない被害に遭われた皆様にお見舞い申し上げます。私は今回の関東・東北豪雨の被災地である常総市へ、この二週間に幾度となく足を運び筆舌に尽くしがたい衝撃を受けました。破堤点の付近に足を運んだ際に濁流により道路が、民家が完膚なきまでに破壊され、かつて民家があったはずの場所が巨大な水たまりが残るだけの更地となっているのを目にしたときはただただ呆然とするしかなかったことを覚えています。

被災前に何度も通った私の慣れ親しんだ道が一夜にしてその面影を失った此度の豪雨。まだ調査の段階で災害の全貌も把握できていない私の脳裏には、何か被害を減らせる方法はなかったのか、また今回の被害から今後治水対策を進める上で何か役に立つ知見を得る事が出来ないか、調査の為に現地に足を運ぶ度この事がひたすら頭に浮かびます。

最後に常総市が一日も早く復興を遂げ元の私の知るいつもの街に戻る日を心から待ち望んでおります。

工学システム学類 4 年

林田 翔太

「初めて触れた災害」

私はこれまで自然災害を経験してこなかった。そして今回、被害調査という形で初めて災害現場を経験した。9月10日の災害発生から2週間以上毎日のように現地へと足を運んだ。災害発生当日は自衛隊による救助活動など目の前で起こる災害現場に圧倒された。翌日からは各所でさっそく復旧活動が行われていた。そのなかでも堤防の応急復旧の早さに驚いた。非常事態に対して様々な組織が自分たちの仕事こなすことで復旧に向けてうまくかみ合う姿は不思議と調和しているようだった。

今後なにかの役に立てればと調査をしていると、や

はり同じ思いで情報を提供してくれる方々に出会った。貴重な情報を提供していただけると同時に調査の励みになった。今回の災害のような事例に学び、人のために役立たせる学問である工学を学ぶ者として、この災害対策活動を通じて少しでも役立てればと思い調査を続けたい。

システム情報工学研究科 博士前期課程 1年
石川 弘之

「災害を経験して」

今回の水害でボランティア活動を行った。そのときに現地の方から、なぜボランティアに参加したのかと聞かれた。私の地元は、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震により、自宅を含め、町中が大きな被害を受けた。このとき多くの方が、ボランティアとして町の復興に協力してくれた。ボランティアの方にお礼を言ったとき、そのうちの1人に、「困っている人がいたら助けるのは当たり前です。あなたの周りでも、今後同じような被害にあった人がいたら、助けてあげてください。」と言われた。この言葉に強く感銘を受け、同じようなことがあれば、小さなことでも自分にできることを行っていきたく考えるようになった。このように答えると、その方は、今までほとんどボランティアには参加したことがなかったが、自分の周りでも災害が発生したときには積極的に動いていきたいと言っていた。関東・東北豪雨による水害は悲惨なものであったが、今回の活動を通して人と人のつながりの大切さを感じることができた。

システム情報工学研究科 博士前期課程 1年
小沼 良輔

「被災地を訪れて感じた事」

私は水戸市の出身で常総や水海道はよく耳にしてきた地名でした。そんな場所が連日テレビで取り上げられているというのは不思議な感覚でした。災害現場を訪れるのは今回が初めてだったのですが、濁流で流された家々を前にすると被害の大きさに自分がその場に居ることに申し訳なさすら感じました。

現地調査では、様々な人々に話をお聞きすることが出来ました。ボランティアを訪れたお宅は、床上浸水の被害に遭われ日中は奥さん一人で掃除をしているとのことでした。掃除を手伝わせていただいたのですが、家屋が木造のため床に泥水がしみ込んでしまい何度拭いても汚れが落ちず、こんな状況で何日も作業している奥さんのご苦労は察するに余りあるものでした。

また、浸水被害を受けた病院を訪れた際には、職員の方に被災当日の様子や復旧の見通しについてお話いただきました。職員で手分けして重篤患者の受け入

れ先の手配・救助の要請、医療機器・入院患者の避難を行ったそうです。現地調査では災害時の緊迫感や災害時対応の難しさを痛感しました。被災された方々の思いを無駄にしないためにも、この災害から得た事を教訓としなければならないと感じました。

システム情報工学研究科 博士前期課程 1年
金子 貴洋

「関東・東北豪雨災害」

今月の初旬に発生した台風18号による影響で、茨城県や栃木県で川が氾濫するなどの大きな被害をもたらしました。そこで研究室では、鬼怒川の氾濫による被害の把握のために対策チームを設置し、氾濫した鬼怒川の水がどのように流れてきたか、各地域の被害状況を調査しています。

私は、この対策チームを通して、被害の現状を見て驚きを隠せませんでした。破堤点が一番近い地域では、建物が流され、一面荒野となっていました。また、災害発生当時は、電気や水は止まるなど、住民への被害は予想を超えるものでした。そして、災害から時間がたった今でも、冠水による被害の復興が続けられています。私もボランティアに行き、復興の手伝いに行きました。実際に行き住民の人々の話を聞かせてもらうと、メディアだけでは知ることのできない災害の怖さや大変さを知ることができました。

今後も、災害の状況調査やボランティアを続けていき、被災地域の復興の力になればと思っています。

システム情報工学研究科 博士前期課程 1年
工藤 拓哉

「常総調査活動を経験して」

今回の大災害の後、実際に被害にあった地域に向かい、その悲惨な現状を目の当たりにしました。また、現地の方々に話を伺い、悲痛な思いや復興に向けた苦勞を感じとりました。最も印象に残ったのは、八間堀川と新八間堀川の分派点近くの病院の看護部長さんのお話です。当日は分派点の水門を閉めるよう、常総市に何度も電話をしたそうですが、閉まることはなかったそうです。そのことが被害を拡大させたのではないかと、怒りを交えて話してくださいました。最善の対応は何であったのか、当日はそれができていたかどうかを明らかにすることが重要であると感じました。また、入院患者を避難させるため、DMAT（災害派遣医療チーム）や自衛隊、消防に救助を要請したそうですが、それぞれに異なる指示を出されたためとても混乱したそうです。各機関の協力体制が確立できていたかどうかという点に疑問を抱きました。

将来に向けて大事なことは、今回の災害によって露

呈した防災体制の弱点を認め、それらの改善を図ることであると感じました。私も現地の方々の思いを無駄にしないよう、今後の防災体制の発展に協力していきたいと強く感じました。

システム情報工学研究科 博士前期課程 1年
有木 吾郎

「調査を通じて」

私は、水害に関わらず「災害現場」という場所に足を踏み入れる事は初めてでしたが、泥まみれになった道路や、ボロボロになった家や田畑を見て、その被害の大きさに衝撃を受けました。調査中も、いくら調査をしているとはいえ、私がここに居ていいのだろうか、住民らにはどう見られているのか、と不安でいっぱいでした。私は幸いにも、調査に対するねぎらいの言葉を掛けていただくことが多かったのですが、研究室の学生の中には怒鳴られた人もいたそうです。

調査については、私は主に「川から溢れた水がどのように町の中を流れたのか」について調べました。私の担当は、鬼怒川と八間堀川の周辺でしたが、鬼怒川から溢れて来た水の勢いは凄まじく、ガードレールやフェンスが倒されており、その威力の大きさを感じました。また、ボロボロの田んぼの中に一枚だけ無傷の田んぼがあったり、ある点を境に流れが逆向きになっている痕跡があったりと、破堤点から単純に広がっているのではなく、高低差によって複雑な流れが生じている事が分かりました。より詳細な状況を把握するためには、今後も調査を続けていく必要があると思います。

システム情報工学研究科 博士前期課程 2年
川畑 遼介

「曜日感覚がなくなってしまう」

この言葉がある奥さんから聞いたとき、今回の水害の悲惨さを私は再認識した。

今月 23 日、私は研究室のメンバーと被害調査で、北海道の、ある一軒家を訪れた。

浸水してから一週間、毎日片付けをしているが、ボランティアの数も少なく、復旧作業の終わりはまだまだ見えないという。4 人家族であったが、子供の学校や旦那さんの仕事があるため、普段は奥さんと息子さんの 2 人で作業をしているそうだ。流れ混んだ土砂は重くひどく臭い、少人数ではなかなか進まない。体は痛み、服は汚れる、来る日も来る日も、決してやりたくはない同じ作業。このような生活を過ごしているうちに、曜日感覚をなくしてしまったのだろう。

奥さんは今、どのような気持ちで私たちに話をしてくれているのだろうか。

水害を起こした自然を恨んでいるのだろうか。普段通りの生活をしている私達を羨ましく思っているのだろうか。一刻も早い復旧を願っているのだろうか。

私たちは、今日も何気なく食事をして睡眠をとっている。しかし、被災地では大勢の方が私たちとは異なる辛い日々を過ごしている。災害が恐ろしいものであることを認識するとともに、何気ない日常生活が幸せであることを実感した。

システム情報工学研究科 博士前期課程 2年
森本 健太

「災害現場を見るということ」

河川の研究室に入って 3 年あまり。全国各地で氾濫の記録や痕跡に出会ってきた。そうした情報に触れるとき、決して緊張感を欠いていたわけではないのだが、どうしても自分のことのように思えない部分があった。しかし今回の災害では、現地に足を踏み入れるたび、起きたことに対する実感が強烈な印象を伴って湧き上がってきた。なぎ倒された電柱、土壌が露出した地面、そして、掻いても掻いても床を侵食するようにめり込む土砂。東日本大震災直後の講義で TV 記者の方が「今の被災地の光景を見るのと見ないのとでは全く意識が違ってくる」とおっしゃっていた意味がようやく理解できた。このような形で災害現場を見る機会が訪れるのは残念ではあるが、だからこそ、河川の研究室として現地の情報を収集、分析し、将来の災害対策に役立てていかなければならないと感じた。

生命環境科学研究科 博士前期課程 2年
鴨志田 穂高

「自然の力の前で人は無力」

水害ボランティアで泥かきをしている最中、水害独特の酸味のある鼻を突く臭いが私に水害の記憶を思い起こさせた。

私が初めて水害復旧活動に参加したのは大学 1 年（2006 年）の頃、鹿児島県の川内川流域である。水没してゴミと化した家財道具の山を見ながら焼酎酒造の奥さんが「思い出が消えました」と一言。自分はそんな奥さんが呆然と立ち尽くす姿を見つつも気の利いた言葉一つかけることはできず、ただひたすら家財道具をゴミとして片づけていくことしかできなかった。自然の力の前で自分が全くの無力であることを痛感し、受け入れ先の宿で形振り構わず大泣きしたことを覚えている。

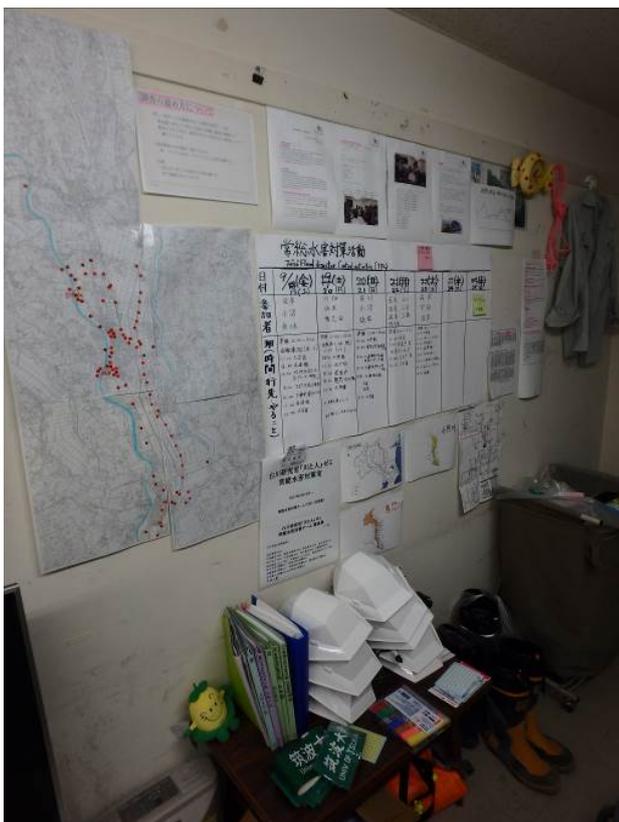
あれから 10 年。自身の身近で水害が起きた。水没した街の上に無数のヘリコプターが飛び異様な光景が広がっていてリアルタイムで進行する被災地を生々しくみた。氾濫直後の被災地で何ができるか色々模索した

が、10年前と変わらずに一かき一かき、民家の泥かきをしている自分がいた。結局のところ、自然災害の前で人の力は無力である。ただ10年前と確実に違うことは河川の研究室に所属しているということ。現在の現地の被害の状況や証言を丁寧に記録、整理、分析し、今後の防災計画に一つでも多く有益な情報を提供することが求められている。被災地から最も近い大学の唯一の河川工学の研究室としての役割を認識しつつ、引き続き活動を続けていきたい。

最後に、今回の常総水害対策チームを白川先生が設置して以降、私がチームのリーダーを務めた。後輩らは通常時の研究室の用務もこなしつつ、夏季休業中の自由な時間の大半を惜しみなく費やしてくれた。非常時ということもあって、ピッチをあげ、大分無理を強いたことは否めない。それでもただひたすらに使命感を持って水害対策活動に取り組んでくれたチームの後輩達に感謝したい。

システム情報工学研究科 博士後期課程
坂本 貴啓

(筑波大学白川(直)研究室 常総水害対策チーム：
白川直樹, 坂本貴啓, 有木吾郎, 川畑遼介, 鴨志田穂高, 森本健太, 石川弘之, 小沼良輔, 金子貴洋, 工藤拓哉, 中原結衣, 林田翔太, 渡邊麻里乃, 佐々木洸, 高鳥圭亮, 佐藤達裕, 藤原誠士, 平尾真菜, 守谷賢人, 山田怜奈)



【JRRN 会員からの提供情報】

■ 第13回 川の自然再生セミナー (10/20 開催)

(公財)リバーフロント研究所から本年の川の自然再生セミナーのご案内です。

■日時：2015年10月20日 (金) 13:00~17:25

■場所：月島社会教育会館 (東京都中央区)

■参加費：無料

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2188.html>



【JRRN 会員からの提供情報】

■ 第186回 河川文化を語る会 (10/14 開催)

(公社)日本河川協会から河川文化を語る会のご案内です。

■テーマ:「日本の水系環境の管理の将来について」

■講師:浅枝隆氏 (埼玉大学大学院理工学研究科教授)

■日時:2015年10月14日(水) 14:00~16:00

■場所:埼玉県民健康センター

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2192.html>



【JRRN 会員からの提供情報】

■ 企画展『雨と防災 あらぶる雨から身を守る』 (9/26-11/9 開催)

「水の巡回展ネットワーク」より、大阪で開催される巡回展のご案内です。

【開催場所】川の駅はちけんや

■開催期間:2015年9月26日~11月9日

■開館時間:10時~17時

■主催:国交省近畿地整、大阪府

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2195.html>



【JRRN 会員からの提供情報】

■ ミツカン水の文化センター第21回里川文化塾『和泉川で学ぶ 多自然川づくり実践のポイントと継承の課題』 (10/17 開催)

ミツカン水の文化センター一里川文化塾のご案内です。

■日時：2015年10月17日(土) 10:00~16:00

■場所：横浜・和泉川

■参加費：無料

■募集人数：25名程度

■主催：ミツカン水の文化センター

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2200.html>



【JRRN 会員からの提供情報】

■ 「第3回 カヌーでつなぐ「琵琶湖・淀川流域圏」~1450万人・水のえん~ (11/21-23 開催)

「カッパ研究会」よりイベント案内を頂きました。

■日時：2015年11月21日~11月23日

■場所：琵琶湖・淀川流域

■参加費：8,000円/日

■主催：琵琶湖・淀川流域圏連携交流会

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2205.html>



【海外からの提供情報】

■ 「ECRR (欧州河川再生センター) の最新ニュースレター」ご紹介

ECRR (欧州河川再生センター) の最新会報 (2015年9月号) が事務局より届きました。

本号では、河川管理の合意形成ツール紹介、河川再生の空間計画の改善に関わる研究報告、来年の欧州河川再生シンポジウムの案内等が掲載されています。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2185.html>



(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

※前頁でご案内した行事は本欄では掲載していません。

■第1回 ミュージアム連携ワークショップ in 大阪

○日時：2015年10月4日(日) 13:30~16:30

○主催：応用生態工学会 大阪

○場所：大阪市立自然史博物館 (大阪府大阪市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2212.html>

■ミズベリング 世界会議 MIZBERING IN OSAKA

○日時：2015年10月9日(金) -11日(日)

○主催：ミズベリング世界会議運営会議

○場所：堂島リバーフォーラム 他(大阪府大阪市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2216.html>

■琵琶湖外来魚駆除大会 in 琵琶湖

○日時：2015年10月11日(日) 10:00~15:00

○主催：琵琶湖を戻す会

○場所：滋賀県草津市津田江1北湖岸緑地

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2202.html>

■応用生態工学会第14回北信越現地ワークショップ in 富山

○日時：2015年10月16日(金) 10:00~17:00

○主催：応用生態工学会 富山

○場所：富山県立大学 大講義室(富山県射水市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2194.html>

■河川・海岸の土砂水理に関するワークショップ

○日時：2015年10月19日(月) 13:00-18:00

○主催：THESIS-2016 in Tokyo 組織委員会

○場所：土木学会講堂(東京都新宿区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2214.html>

■関西地区応用力学フォーラム

○日時：2015年10月23日(金) 13:00 - 16:00

○主催：土木学会応用力学委員会

○場所：京都大学桂キャンパス(京都府京都市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2209.html>

■森里海ミニシンポジウム「琵琶湖の環境と生物」

○日時：2015年10月24日(土) 14:00-17:00

○主催：京都大学森里海連環学教育ユニット

○場所：京都大学農学部総合館2F(京都府京都市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2220.html>

■第15回九州「川」のワークショップ in 諫早

○日時：2015年11月14日(土) ~15日(日)

○主催：第15回九州「川」のワークショップ実行委員会

○場所：諫早市中央公民館(長崎県諫早市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2180.html>

書籍等の紹介

Publications

■できることからはじめよう 水辺の小さな自然再生事例集 (2015.3 発刊)

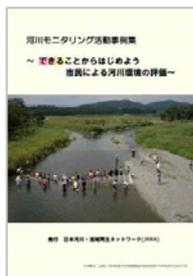
- ・監修：玉井信行 東京大学名誉教授 / JRRN 顧問
- ・編集：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- ・デザイン：本間由佳 鶴川女子短期大学
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2015年3月



市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取り組む「小さな自然再生」の事例集です。小さな自然再生の実践を通じてその技術普及に尽力されている専門家の方々、専門知識の社会への橋渡しの専門家、そして有志の若手研究者や実務者で協働制作しました。

■河川モニタリング活動事例集～できることからはじめよう 市民による河川環境の評価～ (2014.3 発刊)

- ・監修：白川直樹 筑波大学准教授 (JRRN 理事)
- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・編集：JRRN 事務局、筑波大学白川(直)研究室
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

■上記冊子の「印刷製本版」入手方法 ※PDF版はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

JRRN 事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2015年9月30日時点の個人会員構成
(個人会員数：716名、団体会員数：56団体)

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局

〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 新川中央ビル 7 階 (公財) リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

